

## パルミラの青い空 —古代オリエント研究と関西学院—

渋谷 武 弘



三笠宮<sup>たかひと</sup>崇仁親王(以下、三笠宮)は現天皇の叔父であるが、大正天皇第 4 皇子として 1915 年 12 月 2 日に誕生され、このほどめでたく百寿を迎えられた。三笠宮は皇室にありながらも歴史学者として学界には身近な方である。戦後、東京大学で西アジアの古代オリエント史を学ばれ、多数の著作を刊行されたのみならず、東京女子大学などの講師として教壇に立たれたことでも知られている。また日本オリエント学会の創設に尽力され、学界への貢献度が高い。

1956 年 6 月 8 日、9 日の両日、基督教史学会の第 7 回大会が関西学院大学、聖和女子短期大学、神戸女学院大学の 3 校会場を巡回して開催され<sup>1</sup>、このときに初めて三笠宮が本学に立ち寄られた。以下は後に私が文学部の先生方から聞いた逸話である。

スケジュールが長引き終了時間が遅くなってしまった。三笠宮は唐突に上ヶ原キャンパス内で宿泊できる場所はないかと尋ねられた。もちろん関学側に躊躇はあった。残念ながら本学には非常勤講師用の簡易宿泊設備(当時、白鳥池畔にあった教職員クラブハウス「新月クラブ」2 階)しかないのご遠慮申しあげたところ、意外にも、そこでよいからと気軽に宿泊されてしまったという。ずいぶん気さくな方だったのだ。

三笠宮の来校はその後も続く。1963 年 10 月 19 日、20 日の両日<sup>2</sup>、本学で開催された日本オリエント学会第 5 回学術大会に出席され、前日の 18 日には千刈キャンパスも訪ねられている。このとき、新月クラブでまた泊まれるかと打診を受けたらしい。しかし当時はキャンパス内での VIP の夜間身辺警護は難しく、宝塚ホテルに宿泊してもらったという。

さて 1982 年 11 月 20 日から 3 日間、日本オリエント学会の第 24 回大会が本学の第 4 別館を会場にして開かれ<sup>3</sup>、初日の土曜日に私も公開講演を拝聴した。この日、学会を代表して三笠宮名誉会長の挨拶があった。3 度目の来校である。基調講演は樋口隆康京都大学教授(後にシリア・パルミラ遺跡発掘調査団長、2015 年 4 月 2 日逝去)等が行った。当時の城崎進学長も歓迎の言葉を述べ、また後に学長となる柘植一雄教授も事務局に布陣した。お二人とも学会員であったから、実に錚々たるメンバーが揃ったことになる。研究発表会の記録では、田淵結専任講師が報告者に加わっている。本学には聖書研究の伝統があり、学会員も多くいたのである。そして、この多彩な顔ぶれの大会の総司会は、学会の理事でもあった文学部の小玉新次郎教授【冒頭写真】が担当した。

小玉教授は京都大学で東洋史を学び、宮崎市定と羽田明の 2 人の碩学の薫陶を受けている。卒業して関西学院高等部教諭に採用されたが、間もなく文学部栗野頼之祐教授(『出土史料によるギリシャ史研究』で 1951 年に日本学士院賞を受賞)に師事して文学部助手に転じ、古代オリエントの研究を始めた。給料は下がったという。

苦労と研鑽は実を結び、その後に西アジア史の研究書を多く著したが、オアシス都市国家パルミラ研究の日本での先駆者となったことは特筆に値する。井上靖の小説などによって 1960 年代から次第に日本でシルクロードへの関心が高まったが、シリアのパルミラがほとんど知られていなかった時期に小玉教授は英仏などの文献を調べ、また現地をも再三訪ねていた。



新月クラブ



前列ベスト着用がシリア・パルミラ遺跡発掘調査団長樋口隆康教授。その右隣が小玉新次郎教授。

今年になって世界遺産パルミラ遺跡の悲報が続いた。5月に過激派組織ISはパルミラ遺跡を制圧し、8月には遺跡の中心となるベル神殿が破壊されたことが伝えられ、さらに前パルミラ博物館長で高名な学者だったハレド・アサド氏が惨殺された。欧米メディアによれば、同氏は八十余年の生涯をかけて遺跡の保存に尽くした人だったが、捕われて貴重な石像などの所在を問い詰められ、口を割らずに拒み通したためという<sup>4</sup>。ハレド・アサド氏は小玉教授の旧友で、同氏の著作も翻訳している<sup>5</sup>。衝撃的な報道が伝えられたとき、テレビ局から小玉宅に取材が飛び込んだが、本人は既に2年前に亡くなっていた(2013年4月6日永眠、享年86歳)。

パルミラの遺跡が破壊される暴挙と非道に世界の人々は怒りと悲しみの眼を向けた。しかし憎悪による報復は暴力の連鎖を引き起こすばかりで解決手段にふさわしく思えない。戦火の飛び交う現地に為すべを持たないが、歴史文化破壊の愚かさをどう訴えればよいのだろう。

小玉佐智子氏(元神戸女学院大学学長)が今年4月に著された『パルミラの青い空』(創元社)は、夫新次郎を身近な位置からありのままに綴っている。伴侶に伝記を書いてもらう果報は羨望の限りである。たとえ遺跡は崩れても、小玉教授の取り組んだパルミラ研究の功績は消えることがない。

#### 注

- 1 吉田 寅「キリスト教史学会50年史(1949-1998)」上、『キリスト教史学』53集(1999)収録。
- 2 日程の10月19日(土)、20日(日)は『オリエント』6巻1号(1963年8月)の大会開催予告記事、および「関西学院年次報告(昭和38年度)」記載の三笠宮来院記録に拠った。『オリエント』6巻3号(1963年12月)の「日本オリエント学会だより」では、同年9月19日、20日開催と記録されているが、10月の誤りであろう。
- 3 『オリエント』25巻2号(1983年3月)巻末「日本オリエント学会だより」。
- 4 『朝日新聞』「天声人語」2015年9月3日。
- 5 アドナン・ブンニ、ハレド・アル・アサド共著 小玉新次郎訳『パルミラの遺跡』東京新聞出版局、1988年。

【元関西学院職員、大阪大学大学院(文)在学中】



小玉教授が撮影されたこの記念門も破壊されたそうです。  
右はハレド・アサド氏に話しかける小玉教授(写真提供:奈良県立橿原考古学研究所附属博物館西藤清秀館長)。  
前頁下と上の写真(計2点)は、著者を通じ小玉佐智子さんからお借りました。

**「危機に瀕するパルミラ遺跡」写真展**(パルミラ博物館前館長ハレド・アサド氏を追悼するとともに、多くの友人たちの平安を祈って)開催中！ 奈良県立橿原考古学研究所1Fアトリウムにて12月25日まで<8:30~17:15、土日祝日閉館>



学院史編纂室主催の研究会やサロンに度々ご出席くださり、ご親切なアドバイスをくださった小玉先生に改めて感謝申し上げます。パルミラ遺跡破壊の悲報を耳にした時、真っ先に浮かんだのが先生のお顔でした。「アフガニスタンの空が見える、シリアの空が見える」と、亡くなる前日先生はおっしゃったそうです(『パルミラの青い空』より)。

また、三笠宮さまで思い出されるのは、職員としての最初の配属先、理学部での出来事です。「三笠宮殿下がいらしたから、お茶を」と言われ、途方に暮れました。事務室にある湯呑は欠けたものが多く、茶托も粗末だったからです。躊躇していると、「気さくな方だから大丈夫」と言われ、慌てて湯呑を漂白しました。この騒動を機に、来客用の恥ずかしくない湯呑とそれに相応しい茶托を事務長が購入してくれました。(学院史編纂室 池田裕子)